

青山 芳文

(京都府総合教育センター)

京都府総合教育センターの青山です。きょうは、それぞれに違うお考えを持っておられる先生方のお話を伺うことができ、共感したり、時々疑問を持ったりしながら勉強させていただきました。ありがとうございました。

私はもともと宇治市の小学校の教員でした。30年ちょっと前から約20年間、障害児学級（現特別支援学級）やことばの教室（現通級指導教室）で軽度MRの子どもたちや今で言う高機能自閉症やアスペルガー症候群の子どもたち、その保護者と付き合ってきました。

学校における自閉症等の理解には、そのころを振り返ると隔世の感があります。わずか10年前でも全体的な発達の遅れがなければ、こうした子供たちのほとんどがわがままか怠け、あるいは親の育て方の問題としてとらえられていました。それに対して私たちは、「先生方のそういう見方を否定はしない。でも、この子の特性の面からも理解してもらえないだろうか。」と担任の先生に訴えていました。そしてやっと今、学校でもこうした子供たちの行動を障害あるいはその子の特性から理解して、具体的な支援をすることの必要性が認識され始めています。その結果、子どもたちが追い詰められたり、親が責められたりすることは確かに減ってきたように思います。構えではなく、具体性においてはまだまだ不十分ですが。また、先ほど望月先生が言われた観点についても、まだまだ不十分ですが認識され始めてはいます。

きょうの別府先生、岡田先生、坂本先生、窪島先生の御報告、望月先生の御提起の内容からもっともっと学び、学校においてもこうした子どもへの不適切な対応を続けることなく、その子固有の特性に合った対応とか支援方法を開発し実践しなければならないということを、きょうまた痛感しております。ここにいる私たち教員は、その視点でもう1回家に帰ったら復習してい

ただきたい、私もそうしたいと思っています。

さて、このような理解は進んで来た一方、私は学校で見られる次のような状況が気になっています。

一つは、先ほど望月先生言われたこととも共通しますが、残念ながら結構多くの学校に「診断名をもらおうと納得して安心してしまう。親子を病院に行かせて診断をもらってこさせようとする。あわよくば薬と一緒に。」というような傾向があります。

確かに、研修で学んできた特性を踏まえた対応を使って支援することができる学校は増えてきた、また、TEACCHから、PECSから、ABAから学んで支援に生かすことができる学校も増えてきました。しかし一方、対応とか支援方法ばかりに目を奪われて、「その子の今の発達の力を踏まえて、どんな力をどのように育て、どう膨らませるのか。」「そのためにはどんな教材が、活動が大切なのか。」という教育や子育ての視点が薄くなってきているのではないかと危惧しています。これはもちろん研修で学んだ内容そのものの問題なのではなく、学び方あるいは実践の仕方の問題ですが。

10年前、20年前は発達の段階とか教材とか、その子の発達の世界を膨らませようとみんなで議論して実践してきた反面、今から振り返ると、その子の特性に合わない対応や指導方法で子どもを苦しめるということをいっぱいやっていましたが、最近はその子に合った対応や支援方法、この課題をどういうふうクリアさせ、自信を持たせようかということとは十分議論されるようになってきています。でも、この教材が、この活動がその子の発達の力をどのように膨らませるかという議論が少なくなっているように私は感じています。また、個別支援の視点が大切なことはいまでもないのですが、個別指導あるいは個別の取り出し指導の形態に目が向いてしまい、その目標や内容の吟味が不十分という現状があります。

特に特別支援学級。自閉症の発達は定型発達とは違うと言って、研修で学んださまざまな方法で指導する。そのこと自体は否定しません。でも、幼児期の発達の具体的なイメージを持っていない特別支援学級の担任が増えているのは確かです。特性や障害の視点が大切にされる反面、その子の発達の世

界の広がりや関係性を考える視点が薄くなっている気がします。もっとも、このあたりは府内の先生方に学んでいただくという京都府総合教育センターの私の仕事でもあります。

こうした問題意識のもと、特に学習指導に関しては窪島先生の御報告から学びたい、そして、子どもの世界を広げていくためには荒木先生の御報告に再び十分学びたいと思います。

荒木先生はあえて、「基本的には自閉症児も同じ発達の質的転換期を歩む。」と大胆に語り続けておられますね。この視点も大切にして、適切な対応によって支援すると同時に、家庭や学校という普通の生活の場でしかできない内容、親子の関係があり生活がある家庭、教員と子どもの関係や子ども同士の関係がある学校、つまり子どもが普通に生活している場所でしかできない『内容』を創っていくことが特に教育の役割だと考えているところです。

時間がないので、今から議論していただくことはできないと思いますが、是非いつか、TEACCHやABAをベースとして子どもたちを支援されてきた先生方と発達論をベースとして子どもたちを支援されてきた荒木先生に、お互いどこは同意できるがどこは同意できないというように、もちろん対立するものではないと思いますが、かみ合う議論をしていただき、深めていただければという希望を持っています。

最後に荒木先生への御質問です。実はいっぱいあるのですが、とりあえず一点。幼児期から学童期の発達段階にいる子どものあそびの世界の発展、特に「ごっこあそび」の発展は、知的障害の子どもを含め自閉症ではない子どもの場合は、子ども集団を含めて環境を整え、不適切な対応さえしなければ自然に発展して行くのですが、自閉症のある子どもたちの場合、自然発生的に出てくるのか、あるいは何らかの形で教えていくというふうなところがあつたのかを教えてください。

(あおやま よしふみ)